マドックの航海

「伝統」へのまなざしの交錯

森野 聡子 Satoko Ito-Morino

かの地への入植は、女王陛下の領国・領土を大きく広げる、いや、これらの土地に対して所有していた古の権利・権益を取り戻すと言うべきであろう。というのも、高潔にして誉れ高き人物、王家の血を引き、ウェールズに生まれた、その名もマドック・アプ・オーウェン・グウィネッズなる者がイングランドの海岸から船出したのが去る1170年、上陸した地に自分と随行した一団を住みつかせ、やがて自らはイングランドに戻ったが、幾名かは残していった。ウェールズの古い年代記によれば、彼は土地や獣や鳥にウェールズ語の名前をつけた、たとえば、ペングウィン〔pengwyn：ウェールズ語で白い頭の意。ペンギンの語源〕といった名称で、それらは今日まで残っている。〔中略〕陛下が所有権をお持ちであることのさらなる証拠としては、この高貴なブリトン人の到来後、女王の祖父であられるヘンリ7世の御世に、国王陛下は、イタリア人ジョン・カボットと3人の息子、ルウィス、セバスティアン、サンキウスに野蛮人と異教徒の住む辺境の国々を探索する免許を認可、発見がイングランド王冠のために遂行され、かの王の御世に、セバスティアンとサンキウス、イングランド生まれの二人の息子によって実現された。その確かな証として、ニューファンドランドには美しい港があり、その名は今でもサンキウスの港と呼ばれていて、彼らが北緯63度の地からフロリダ半島までの海岸を最初に発見したことを示している。

ジョージ・ペッカム『ニューファンドランド発見の真相』第3章より（1583年）[1]

コロンブスに先立つこと3百年前にアメリカ大陸を「発見」したヨーロッパ人がいる。それは、北ウェールズの領主オワイン・グウィネッズの息子マドック（Madoc

ap Owain Gwynedd)。ペッカムが典拠とした「ウェールズの古い年代記」[2]によれば、マドックと同胞が移住した、豊かで平和に満ちた新天地はフロリダからメキシコ湾一帯、16世紀にはスペインが植民地として支配していた地域である。これを踏まえ、ペッカムは、アステカの君主モクテスマ2世がコルテスの前で語った言葉を引用し、アステカ人の祖先は遠い国から来たと信じられていたこと、すなわち彼らこそマドックの子孫であると主張する。エリザベス1世の祖父でテューダー朝の開祖ヘンリ7世は、もともとウェールズの出自だったから、「マドック航海譚」は、ウェールズ王族の血を引く現イングランド君主、エリザベス女王こそ新大陸の正当な支配者である証として大いに喧伝され、エリザベス朝の北西航路探検と新大陸植民の大プロジェクトに一役買うこととなった。

マドック伝説が本格的に蘇るのは18世紀後半、北米大陸の領有をめぐり、イングランド、スペイン、フランスが三つ巴の覇権争いに明け暮れていた時代である。けれども今回の「マドック航海譚」受容は帝国主義的文脈にとどまらなかった。アメリカには、イングランドに征服される以前にウェールズから渡った同胞——ウェールズ語で「マドグウィス（Madogwys)」——が、昔同様、自由を謳歌し、先祖の言葉を守って生活している。アメリカこそウェールズ人が新しきウェールズ、「グラドヴァ(Gwladfa)」を建設すべき新天地であるという、マドックの子孫探しとアメリカ移民の夢が結びついたのである。

この新たなマドック伝説に惹きつけられアメリカをめざしたのは、ウェールズ語伝統文化復興を志すインテリ層、信仰の自由を求めるプロテスタント、貧困と労苦から逃れたいと願う小作人や労働者、フランス革命に感化された急進派、千年王国思想を信奉する神秘主義者などさまざまな人々だった。結局、彼らは「ウェルッシュ・インディアン」の住まう桃源郷に至ることはできなかったが、こうした新大陸移民の夢が、1865年の、アルゼンチンにおけるウェールズ人居住地、パタゴニヤ（Patagonia）建設に結実することになる。

「マドック航海譚」とその受容をめぐる物語は、「伝統」、とりわけ「移民」と「伝統」の継承について考える上で重要な視座を提供する。ニューファンドランド伝統歌謡の部の通訳として、シンポジウム主催者と講演者のDrヘイワード、アーティストのジム・ペイン、この3人の間のコミュニケーションを仲介する中で、それぞれの立場による「伝統」へのまなざしの違いを痛感し、コーディネートする側としては大いに苦労したが、同時に、ウェールズ伝統文化の研究者として、「伝統」について改めて考える契機となった。

主催者が当初から講演者へ強く要望したことの一つは、アイルランド移民のゲール語（アイルランド語）歌謡がどのように伝承されているのか、とりわけ「聖ブレンダンの航海」をめぐる伝承について紹介して欲しいという点だった。Drヘイワードの講演原稿によれば、ゲール語の歌はまったく残っていないという。ジム・ペインもまた、筆者の質問に対し、アイリッシュ・バラッドはあるにはあるが、いずれも「英語で歌われる」と述べている。

『タイタニック』や『ギャング・オブ・ニューヨーク』といったハリウッド映画の影響、ジャガイモ飢饉による大量移民の歴史もあって、新大陸への移民というと「アイルランド人」を連想する者は多い。だがニューファンドランドには、この前提は当てはまらない。

冒頭に引用したペッカムの記述にもあるように、ジョン・カボットこと、イタリア生まれの探検家ジョヴァンニ・カボート（Giovanni Caboto, c. 1450～c. 99）が同国人コロンブスに触発され、カタイ（中国）と香料諸島への最短航路を探すためにブリストルを出帆し、北海経由でニューファンドランドに上陸したのが1497年[3]、その後、カボートのスポンサーだったブリストル商人が中心となり、ジェイムズ1世の勅許を受け、ニューファンドランド西部、セント・ローレンス湾の入り江沿いにクーパーズ・コーヴ（Cuper's Cove）を建設したのが1610年のことである。クーパーズ・コーヴは、ヴァージニアのジェイムズタウン（Jamestown）に継ぐ、新大陸におけるイングランドの二番目の入植地となった。

つまり、ニューファンドランドは元来がブリストルを拠点とするイングランド貿易商が経営する漁業基地で、アイルランドからの移民は後発だった。ニューファンドランド州立メモリアル大学地理学教授ジョン・マニオンによれば（Mannion: 2000）、それも当初はイングランド人のもとで働く男性季節労働者が大半で、本格的な移民が行われるのは1800年～35年ごろだという。したがって出国の原因はジャガイモ飢饉ではなく、貧困と雇用の問題だった。1836年の調査では、セント・ジョンズの住民の約半数がアイルランド系で、彼らのほとんどはゲール語を母語とするカトリックだったと考えられる。けれども、母国とはまったく異なる自然・気候・生活環境の中で暮らし、働き、経済力や成功を得るために、英語が移民の間に次第に浸透していったことは想像に難くない。実際、2011年の国勢調査では、ニューファンドランドとラブラドール州において「ゲール語」（スコットランド・ゲール語も含む）を母語とすると回答した者はわずか15名だった[4]。

このことは、移民集団の中で言語を始め、さまざまな「伝統的要素」が混交しあい、

ニューファンドランドという新たなアイデンティティを形成していったことを示唆している。ニューファンドランドが最後までカナダに加入しなかった背景も、この島がイングランドのもっとも古い植民地であるのに対し、カナダ本土が歴史的にフランス領であったからだけではない。19世紀末にカトリック系住民が作ったというニューファンドランドの三色旗は、連合王国からの独立をめざすアイルランド人とイングランド人の対立が激化する中、ニューファンドランドでは「アイルランド」(緑) と「イングランド」(ピンク) が融和していることを象徴するものだとジム・ペインが語っていた。

2006年の国勢調査によれば、ニューファンドランド＝ラブラドール州の住民のうち、自分のエスニシティを「カナダ人」と答えた者が一番多く (約24万人：人口比34%)、次いで「イングリッシュ」(約21万)、「アイリッシュ」(約10万)、「スコティッシュ」(約3万5千)、「フレンチ」(約3万)、「ノース・アメリカン」(約2万4千) と続く[5]。一方、「ニューファンドランダー」という回答も4,610件あった。これは複数回答を含む数字であるが、植民地建設から千年が経過した今、ニューファンドランドに民族的ルーツの意識と並んで、新たな統合的アイデンティティが浸透しつつあることの証拠である。ちなみにジムの父方は1678年にデヴォンから入植したイングランド人 (さらに遡るとウィリアム征服王とともにフランスから渡ったユグノー派だという)、母方は祖父の方がアイルランド南部からの移民、祖母の方がチャンネル諸島の出身だそうで、彼は自らを「ニューファンドランダー」と呼び、その理由として、自分はカナダへの統合以後に生まれたが、ニューファンドランドは歴史的に北米よりもヨーロッパとの絆が強く、かつてはパスポート、通過、切手もカナダとは別であったし、今でも自前の「国歌」を有していることをあげ、本土とは一線を画した「ニューファンドランダー」の住民意識を裏付ける。

このように、ニューファンドランドの植民地史を紐解けば、ゲール語伝統文化が現存しない事実はさほど驚くには値しない。けれどもその一方で、18世紀のマドック・フィーバーが示すように、移住した遠国で、本国ではとうに廃れてしまった「伝統」が昔ながらに残っているという期待が人々を突き動かすのもまた事実である。

それでは「聖ブレンダンの航海」はどうだろうか。ブレンダン (Brendan / Brendanus) とは、アイルランドのクロンファート修道院などを創設した、6世紀の実在の聖人である。9世紀にラテン語で書き残された『修道士・聖ブレンダンの航海』(*Navigatio Sancti Brendani Abatis*) によれば、ブレンダンは「約束の地」を求めて仲間の修道士とともにアイルランドの西に船出し、7年の間、西海の不思議な

島々をめぐったとされる。

英語版ウィキペディアの「ニューファンドランド島」の項には、聖ブレンダンが島を発見したという説から、ニューファンドランドでは「聖ブレンダンの航海」という歌が知られていると記されている[6]。けれども筆者が調べた限り、そのような名の伝統歌謡は見つからなかった。ジム・ペインに問い合わせたところ、ブレンダンが登場する歌は2曲知っているが、どちらも伝統的なものではなく、大学生になって初めて聞いたものだという。

実はジムが大学生だった1970年代後半、聖ブレンダンをめぐる、ちょっとしたニュースがあった。イングランドの冒険作家ティム・セヴェリン（Tim Severin, 1940～）がブレンダンの航海は事実に基づくと考え、当時の皮張りの船カラハを復元、実験航海に乗り出したのだ。「ブレンダン号」は1976年5月17日にアイルランドのディングル半島から出帆、翌年6月にニューファンドランドに到着した。セヴェリンは、航海が可能であること、ブレンダンがめぐった島々も実際の地理に該当すると主張し、冒険の顛末を『ブレンダンの航海』（*The Brendan Voyage: The Seafaring Classic That Followed St. Brendan to America*）として1978年に出版した[7]。1980年には、セヴェリンの本に基づいて、アイルランドの作曲家ショーン・ダヴィー Shaun Davey（1948～）が、アイルランドの伝統楽器イーリアン・パイプスとオーケストラとのために組曲『ブレンダンの航海』（*The Brendan Voyage*）を作曲する。その後も、1985年には、アイルランドの有名なシンガー、クリスティ・ムーア（Christy Moore, 1945～）がアルバム『オーディナリー・マン』（*Ordinary Man*）の中で「聖ブレンダンの航海」（Saint Brendan's Voyage）を、1989年には、同じくアイルランドのフォーク・ミュージシャン、トミー・メイケム（Tommy Makem, 1932～2007）がアルバム『ローリング・ホーム』（*Rolling Home*）で「ブレンダン」（Brendan）を発表。いずれも、セヴェリンのベストセラーがきっかけで誕生した歌である。

では、ブレンダンの航海とニューファンドランドの結びつきはメディアがでっち上げたものかというとそうとも言い切れない。今回、調査をしていて面白い事実を発見した。前述のように、1487年のジョヴァンニ・カボートの航海を支援したのはブリストル商人である。彼らの目的は北海のタラ漁場確保だけではなく、「ハイ・ブラジル」（Hy-Brasil）と呼ばれる、西海の果てにある「地上楽園」の探求だったという説が、ブリストル大学の「カボット・プロジェクト」によって検証されている[8]。

「ブラジル」は、南米に実在する国家とは無関係で、語源は定かでないが、一説に

はゲール語で「祝福された・美しい」を意味するbresであるとされる。ハイ・ブラジルは14世紀から海図に登場（現存する最古のものは1325年）するとともに、ブレンダンが到達した、秋なのに果物のたわわになる木々に覆われ、一日中日の沈むことのない広大な島、いわゆる「ブレンダンの島」と同一視されるようになった。さらに15世紀に入ると、インド原産で、高価な赤い染料のもととなる木「ブラジルボク」（ポルトガル語でpau-brasil）と混同され、伝説のハイ・ブラジルは、この木の生える島であると考えられた。（後にポルトガル商人が南米でこの木を見つけ、それが現在のブラジルの国名の由来となった。）

1498年7月25日、ロンドン駐在のスペイン大使ペドロ・デ・アヤラがスペイン両王フフェルディナンドとイサベルに送った書簡には、ブリストル商人が、ジェノヴァ人（カボートのこと）の夢想に導かれ、この7年間「ブラジルの島」と「七つの都市」を捜す航海を続けており、ついに昨年その地を発見したという証拠がイングランド王に送られた、と言う記述がある[9]。大航海時代、ヨーロッパによる植民地開拓の背景には、利権だけでなく、人々を突き動かす「伝説」の力もあったのである。

こうして、マドックとブレンダンにナビゲートされながらたどってきたのは、言うなれば、「伝統」への「訪問者」のまなざしである。「訪問者」には、探検家・移民・ツーリストなどが含まれるが、いずれにしろ、「伝統」の「外部」に存在する者が抱く、異国への夢想と憧憬に裏打ちされた視線である。一方、Drヘイワードは、同じく「外部」の者ではあるが、島嶼文化の研究者として、「伝統」へ違ったまなざしを注いでいた。

彼の講演原稿でキーワードとなるのが「オーガニック」という言葉である。「アーティフィシャル」と対置させていることから、人工的なものが一切介在せず、自然に生まれ育ってきたものこそ真正の「伝統」であるという主張を表したものだ。けれども、ホブズボーム（Hobsbawm et al eds. 1983）の言を待つまでもなく、「伝統」とは、それが衰退しようとするときに「伝統」として意識されるものであり、共同体の生活の一部として「自然に」生きている間は「伝統」と呼ばれることはない。「伝統」は、かくして、消滅の危機の中で「保存」や「継承」が叫ばれる。それだけではない。時には、これこそ、失われた「伝統社会」のあるべき姿であるとして、「伝統」が新たに「発明」される場合もある。

ホブズボームの『創られた伝統』の中で、ウェールズの歴史家プリース・モルガン（Prys Morgan）が、中世ウェールズのバルドの祭典として19世紀初頭に「復活」された「アイステッズヴォッド」（eisteddfod）について語っている。復興を担ったのは

マドック一族探しを主導したウェールズのインテリたちである。復活したアイステッズヴォッドでは、古代ケルトの神官ドルイド風の衣裳をまとった当世のバルドたち、ストーンヘンジを小型化したようなストーン・サークル、そしてバルドの長がサークルの真ん中で剣を抜き開会を宣言するといった「演出」が付け加えられた[10]。これらは本来のバルドの式典とはまったく関係なく、再興されたアイステッズヴォッドが「古式ゆかしい儀式」であることを強調するために、歴史的・文化的文脈の異なるものがブリコラージュならぬ、ごった混ぜとして寄せ集められたに過ぎない。たとえて言えば、古代日本にあった歌垣を再現しようという話になって、卑弥呼風の衣裳（といっても正確にはどのようなものであるかは不明であるが）をまとった巫女の一団をそろえ、注連縄を張った舞台をしつらえるようなものだ。

けれども、1819年に復興されたアイステッズヴォッドは200年近い歴史を経て、今日では毎年8月に全ウェールズから人が集う民族的行事となり、ウェールズ語による古い韻律詩や民謡の継承、地域おこし、そして何よりもウェールズ語活性化のために欠かせない「伝統」として定着している。もちろん、このような「創られた伝統」がすべて存続するわけではなく、アイステッズヴォッドの場合は、ウェールズ語文化に根ざした「ネイション」の「記憶」として、ウェールズの民族的アイデンティティを構成する要素になったからである。一方、同時期に「発明」されたウェールズの民族衣裳は、そのような発展を欠いていたため、今では、絵葉書やみやげ物の中でしか見ることができなくなった。

Dr ヘイワードのもう一つのキーワードは「伝統継承者」（tradition bearer）である。シンポジウムの際、ジム・ペインに「伝統継承者」とは具体的にどのような人のことか、そのように呼ばれることにどう感じるかと尋ねたところ、自分が「伝統継承者」だなど思ったことはない、とこそばゆそうに答えた。今回、寄稿してくれた原稿でも、「伝統継承者」という言葉からは、伝統が死んでしまった地域で、昔の伝統はこうだったと人々に教える任務を任された人間のことのようだと述べている。これが、「伝統」を外から見つめているのではなく、その中で生きている者のまなざしとでも言うべきか。

ジムはいくつもの印象的な発言をしている。たとえば、「ストーリーテラー」と名乗る者は「伝統」の外部の者だ、なぜならば、共同体の生活の中では、歌うこと、踊ること、物語を語ることは密接に結びついているから一部だけを切り取ることはできないと言う。実際、ジム自身、ステージでは歌い、踊り、演奏し、大いに語った（彼は役者でもある）。このように、部外者が「伝統」と呼ぶところの、共同体における

習俗がホリスティックであるのは、ジムが述べているように、それが共同体の成員の日常のリズムを作り、彼らの集団的意識の絆となってきたからである。

ジムの父親もそうだったが、男は、夏は漁業、海が凍る冬には伐採の仕事と、季節労働によって家族を養う。家に残った女たちは、赤ん坊に唄をきかせ、物語を語る。現金収入は少なく、ほとんど自給自足のような暮らしで、娯楽といえば、みなが集まって飲み食い、踊り、歌い明かすこと。このような生活の中で、ジムは「自然に」音楽と親しんできたという。であるから、移民が本国から持ってきた伝承歌の中でも、こうしたニューファンドランドでの住民の生活や心情にそぐうものが今日まで歌い続けられてきたに違いない。たとえば、シンポジウムでジムが披露した「昔は若くて陽気な風来坊」(I've Been a Gay Roving Young Fellow) というバラッドである。ニューファンドランダー同様、海で生計を立てる船乗りの歌だ。若い時分は荒海にくり出し港という港をめぐっていた船乗りが、やがて結婚して陸暮らしを始める。

俺が死んでもめそめそするな　フィドルを奏で俺の墓で踊ってくれ
俺の棺桶にグラス一杯たむけて一言言ってくれ、いいやつがいっちまったと

この歌をめぐってちょっとした逸話がある。ジムが初めて父祖の地イングランドを訪れたのは1983年、サー・ハンフリー・ギルバートのニューファンドランド上陸400周年記念の時だった。地元のフォーク・ミュージシャンと交流するうち、A Rakish Young Fellowというデヴォンで収集された歌を聞いて、ジムはびっくりした。故郷でおじから聞き覚えた歌とそっくりだったからだ。それが、上記のI've Been a Gay Roving Young Fellowである。やがて、どちらも、スコットランドでThe Tarpaulin Jacket (tarpaulinは漁師が着る防水ジャケットの意) という名で知られるバラッドのヴァリエーションであることが判明した (Tucker 2011)。

同じくジムが歌った「そりひきの若者」(Double Sledder Lad) は、丸太を切り出して、そりにのせ、馬で運んでいくさまを歌った仕事歌で、コーラスの「スナップ、クラック」というところでジムは太ももを叩き、馬に鞭を当てる音を再現した。この歌はイングランドでは「荷車ひきのジム」(Jim The Carter Lad) として伝わっており、「クリック、クラック」と鞭を鳴らしながら、荷馬車で町から町へと物を運ぶ若者が主人公だ (同書)。これは、伝統歌謡が、ニューファンドランドの環境に適応して生き延びた例である。

ジムは伝承音楽を演奏するだけでなく、自らもニューファンドランドの生活に根ざ

した歌を作っている。「波また波がへさきで砕ける　俺みたいな船乗りには塩っ辛い海を航海するしか生き方はない。今度生まれ変わったら　もう一度海で生きたい」と歌うWave over Waveは、ジムのオリジナルの「シャンティー」(船乗り歌）だ。一方、Empty Netと同様、伝統的生活の危機と共同体の崩壊を歌ったのが「消え行く灯台」(Another Fading Light）である。漁業をあきらめた人々が島を去るにつれ、彼らの船を導いてきた灯台の灯りもまた一つ消えていく。浜辺には無人の船だけが残され、雪が足元でさくさくいう。

けれどもジム・ペインは未来を悲観してはいない。彼は言う。「〔かつて先祖は〕新世界での生活の有り様を日々の労働から生まれた新しいリズムにのせ歌った。この地の厳しい環境の中で育ってきた社会を支えるには、住民同士が密に協力しあい、前の世代の経験から学んだことを活かしていかなければならなかった。集団としての意識が生活のリズムと生存のための技術を次世代に教えたが、それは例外なく歌や物語から発せられ、世代から世代へと伝承された」。

生活の鼓動と生きる知恵を形にし、伝えていくものが「伝統」であるならば、時代や生活環境の変化とともに新しい歌や物語が生まれ、世代を超えて伝えられていくことを彼は信じて疑わない。

注

1　エリザベス1世より北方航路探求の勅許を得たサー・ハンフリー・ギルバート（Sir Humphrey Gilbert, c.1539～83）が、女王の名のもと、ニューファンドランドをイングランド初の海外植民地として宣言したのが1583年8月5日のことである。その航海に同行したジョージ・ペッカム（George Peckham, d.1608）が、ギルバートが二度目の航海で帰らぬ人となった後、ニューファンドランド発見の顛末として出版したのが本書（*true reporte of the late discoveries and possession taken... of the Newfound-landes... Wherein is also breefely sette downe her highnesse lawfull Tytle thereunto, and the great and manifolde commodities that is likely to grow thereby to the whole Realme in generall, and to the adventurers in particular*）だ。ペッカムの書は、後にリチャード・ハクルート（Richard Hakluyt, c.1552～1616）が編纂した『イングランド国民の主要な航海』(*The Principal Navigations, Voiages, Traffiques and Discoueries of the English Nation*, 1589-1600)、第13巻「アメリカ」の第2部に収録され、広く知られるところとなった。本文の引用もハクルートの航海記集を典拠としている。

2　この年代記とは、ウェールズ人ハンフリー・スルウィッド（Humphrey Llwyd, c.1527～68）が1559年に書いたとされるウェールズの君主たちの年代記の手稿で、ペッカムはジョン・ディー（John Dee, 1527～1608）を通じて、マドック伝説を知ったと考えられる（Williams

1987: 41-47)。

3　カボートは、当時の地理的知識に従って、自分が上陸したのはカタイ、つまりアジア大陸の一部だと考えた（スケルトン1991: 64)。アメリゴ・ヴェスプッチによって、コロンブスらが到達したのがアジアではなく、これまで知られていなかったまったくの「新世界」であることが確認され、彼の名をとって「アメリカ」と呼ばれ、独立した大陸として地図に描かれるようになるのは1507年のことである（同書: 57)。コロンブスの航海にも同行したバスク出身の航海者ホアン・デ・ラ・コーサが1500年ごろに作成した世界地図には、アメリカの北東の海岸線に5つのイングランド旗が描かれ、その一帯に「イングランド人によって発見された海」（mar de descubierta por inglese）と書き込まれ、ニューファンドランドかノヴァ・スコシアにあたる部分が「イングランド岬」（Cauo de ynglaterra）と記されており、カボートの航海によってイングランドが新大陸の北辺からフロリダ半島までを「発見」したというペッカムの記述と合致する。ラ・コーサの地図については以下のURLを参照（http://www.heritage.nf.ca/exploration/bretonfall.html)。

4　Newfoundland & Labrador Statistics Agency, Mother Tongue by Sex, Newfoundland and Labrador and St John's Census Metropolitan Area, 2011 Census http://www.stats.gov.nl.ca/Statistics/Census2011/PDF/LAN_Mother%20Tongue_NLCMA.pdf）2012年11月11日閲覧。

5　Statistics Canada, 2006 Census, Population by ethnic origins, Newfoundland and Labrador, http://www12.statcan.ca/census-recensement/2006/dp-pd/hlt/97-562/pages/page.cfm?Lang=E&Geo=PR&Code=10&Data=Count&Table=2&StartRec=1&Sort=3&Display=All&CSDFilter=5000　2012年10月31日閲覧。

6　http://en.wikipedia.org/wiki/Newfoundland_(island)　2012年10月31日閲覧。

7　本の詳細については、セヴェリン自身のHP（http://www.timseverin.net/books_brendan_voyage.html）を参照されたい。

8　ブリストル大学歴史学科のセミナー The Smugglers' City = Jones 2007および、The Cabot ProjectのHP（http://www.bristol.ac.uk/history/research/cabot.html）を参照。

9　「七つの都」とは、当時、スペイン人が新大陸にあると考えた伝説の黄金都市のこと。書簡の英訳はJones 2006を参照。

10　復活されたアイステッズヴォッドの歴史については、森野2007、第4章を参照されたい。

参考文献

Cantarino, Geraldo 2008. An island called Brazil, *History Ireland*, vol. 16, 2012年11月1日閲覧 http://www.historyireland.com/volumes/volume16/issue4/features/?id=114331.

Hakluyt, Richard 1589-1600. *The Principal Navigations, Voiages, Traffiques and Discoueries of the English Nation*, 電子版, 2012年10月31日閲覧 http://www.gutenberg.org/files/25645/25645-h/25645-h.html#toc5.

Hobsbawm, Eric and Terence Ranger eds., 1983. *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press.

Jones, Evan 2006. Pedro de Ayala, the Spanish envoy in London, to King Ferdinand and Queen Isabella in Spain, 25 July, 1498, 2012年11月1日閲覧
http://www.bris.ac.uk/Depts/History/Maritime/Sources/1498ayala.htm.

Jones, Evan 2007. Salazar's account of Bristol's discovery of the Island of Brasil (pre 1476), 2012年11月1日閲覧
http://www.bris.ac.uk/Depts/History/Maritime/Sources/1476brasil.htm.

Mannion, John 2000. The Irish in Newfoundland, 2012年10月31日閲覧
http://www.heritage.nf.ca/society/irish_newfoundland.html.

Tucker, Marilyn 2011. 'Shore To Shore': 400 years of folk connections between the south west of England and Newfoundland, *Folklife West Journal*, No.5, 2012年11月10日閲覧
http://www.folklife-west.co.uk/FWJ5-Nfld.pdf#search='I%E2%80%99ve+Been+a+Gay+Roving+Fellow'.

Williams, Gwyn A. 1987. *Madoc: The Legend of the Welsh Discovery of America*, Oxford University Press.

スケルトン、R・A 1991.『図説・探検地図の歴史——大航海時代から極地探検まで』、増田義郎・信岡奈生（訳), 原書房.

森野聡子・森野和弥 2007.『ピクチャレスク・ウェールズの創造と変容』、青山社.